

〈彙報〉

平成四年度 国文学科活動報告

文学遺蹟めぐり―比叡山延暦寺―

日時 平成四年五月二十七日(水)

行程 (長堀駐車場)―坂本―延暦寺東塔・根本中堂―

〔延暦寺会館・昼食〕―延暦寺西塔・釈迦堂―横

川―比叡山国宝殿―坂本―(JR新大阪駅)

対象 国文学科一、二年生全員

下界では、行く春を惜しんでいるころ、比叡のお山には、昼間でも冷気が感ぜられました。根本中堂に参詣。写真撮影。延暦寺会館で昼食。その後、大講堂、戒壇院、阿弥陀堂などに自由参詣しました。午後は、釈迦堂など西塔地域に参詣、写真撮影。そして恵心堂に参詣。四月二十九日にオープンしたばかりの比叡山国宝殿参観後、坂本を経て、JR新大阪駅前で解散しました。

根本中堂、横川では学年ごとに、ご法話をいただき、恵心堂では、紅模先生から日本浄土教の元祖とされる恵心僧都(源

(信)について、ご法話をいただきました。延暦寺は伝教大師が創建され、鎌倉仏教の祖師たち(法然・親鸞・日蓮・栄西・道元)が修行なさった地で、ここを訪れたことは、大変有意義な一日であったと思います。(I)

国文学科講演会

日時 平成四年六月二十四日(水) 第五・六時限

対象 国文学科一、二年生全員

会場 南港学舎講堂

講師 大阪市立大学名誉教授

相愛大学客員教授

直木 孝次郎先生

演題 「柿本人麻呂と大伴家持

―史的背景からみた歌風の特徴―

今年度の講演会には、古代史の権威直木孝次郎先生を講師としてお招きした。先生は相愛大学教授として在職され、短大の講義も担当していただいた。宮中での歌会始めの召人をおつとめになったのは丁度その頃の事で、先生はご専門とされる古代史のほか、短歌や歌壇史にもご造詣が深い。現在も週に何度かは相愛にお越しになる先生にお願いしたところ、快くお引き受けいただき「柿本人麻呂と大伴家持」について

のご講演をしていただくことができた。

萬葉集の代表的歌人である人麻呂と家持の経歴をはじめ歌風に至るまでを作歌をあげながら丁寧な説き、二人の歌風に萬葉の時代の史的背景が大きな意味を持つて話を話してくださった。学問に対する真摯な姿勢にも触れることのできた先生のご講演は、聴講の国文学科学生一同に深い感銘を与えた意義深いものであり、貴重なひとときであった。

(K)

能楽鑑賞と難波宮跡見学

日時 平成四年十一月十一日(水)

午前十時から午後二時

大槻能楽堂(大阪府中央区上町A番七号)

参加者 短期大学一、二年生全員三九〇名

専任教員六名・助手二名

演目 解説

能「巴」

里女・巴御前の霊 大槻 文蔵

旅僧 指吸雅之助

粟津の里人 茂山あきら

笛 野口 浩和

泉 嘉夫

狂言「昆布売」

大名 木村 正雄
昆布売 茂山あきら
(敬称略)

小鼓	成田 達志
大鼓	守家 紀之
後見	水田 博
地謡	武富 康之
波多野 晋	波多野 晋
赤松 禎友	赤松 禎友
上野 雄三	上野 雄三
山本 正人	山本 正人
増田 登	増田 登
桑野 剛年	桑野 剛年
根岸 住郎	根岸 住郎
久保誠一郎	久保誠一郎

以上の要領で平成四年度の芸能鑑賞を実施。学生には事前
に大槻能楽堂発行の学生鑑賞能のパンフレット、及び研究室
からも資料を配付し、またクラスごとにビデオなどを用い、
能や当該演目についての理解を深めた。その効果があつて学
生は熱心に観ていた。

観能の後、史跡「難波宮跡」を見学。北谷先生作成のプリ

ントによつてその解説を聞く。晴天にめぐまれ、概ね、中世と古代に思いを馳せる国文学科らしい行事となった。

ところで、難波宮は大極殿と南中門の二棟の再建が二十一世紀初めに実現するらしい。いつか復元された難波宮に集う日を楽しみにしたい。

(S)

相愛萬葉ウオーク

——土の香漂う山の辺の道——

第二回相愛萬葉ウオークを次のように行いました。

日時 平成四年十月十一日(日)

行程 桜井駅―海柘榴市観音―金屋の石仏―平等寺―三輪

明神―狹井神社―玄寶庵―檜原神社―巻向川―相撲

神社―穴師坐兵主神社―垂仁天皇纏向珠城宮址―J

R 巻向駅

講師 北谷幸冊(本学助教教授)

対象 国文学科学生有志・卒業生・同窓会会員・一般。

第三回相愛萬葉ウオークは、平成五年十月十一日(振替休日)JR巻向駅集合(十時)、巻向―石上布留の社まで歩きます。

相愛萬葉ウオーク―山の辺の道―に参加して

松本道子

楽しみにしていた文学散歩、第二回相愛萬葉ウオーク(十月十一日(日))に参加しました。今回は「土の香漂う山の辺の道」を歩こうというので、十時前から桜井駅に大勢の人が集合していました。北谷先生からの挨拶の後、総勢九十余名、意気揚々といざ出発。

山の辺の道は、七世紀の初め、三輪山や巻向の山裾を縫うように作られた全長三五キロメートルの日本最古の道です。最初に到着した海柘榴市は古代に市として栄えた所です。

紫は灰さすものそ海柘榴市の八十の衢に逢へる児や誰

(巻二―三―一〇二)

たちちねの母がよぶ名を申さめど道行人を誰と知りてか

(巻二―三―一〇二)

の歌を聴くと若い男女のほほえましいやりとりが目に見え、さうで暖かいものを感じました。「海柘榴市」は、『枕草子』にも「市はたつの市。さとの市。つば市。おふさの市。あすかの市。」とあります。

民家の間を抜けて金屋の石仏を巡り、平等寺へ。平等寺は境内に珍しい熱とり地藏や仏足石があり、静寂な雰囲気を感じ

じられる所です。木立ちの中を行くと我が国最古の神社三輪神社です。御神体である三輪山に荘厳さと華麗さを感じました。先生の解説を聴くと、三輪山にまつわる歌がたくさんありましたが、

うまさけを三輪の祝が斎ふ杉手触れし罪か君に逢ひかたき
(巻四―七二)

の歌が気に入りました。

ありがたい御神酒の香りをいただき、大和一の宮の三輪神社を後にしました。神秘的な雰囲気を持つ狹井神社を見学して、萬葉展望台へと向い、そこでお弁当タイム。大和三山や日本一の鳥居を眼下に一望してのお弁当の味は格別でした。元気づいて、神武天皇聖蹟跡から謡曲「三輪」の舞台としても有名な玄寶庵へ。木もれ陽を受けながら歩くと太古の旅人になったような気分です。

悠久の時の流れに思いを馳せながら、三輪神社の摂社のひとつである檜原神社に着きました。天照大神が伊勢神宮に移る前にここに祀られていたといわれ、垂仁天皇によって大御神が伊勢に移されてからは「元伊勢」と呼ばれるようになったそうです。いかにも神が宿っているような厳かな雰囲気、山の辺の道で一番気に入っている所です。萬葉集には「三輪の檜原」として六首も登場していることですが納得させられます。先生の解説にみんなも真剣に聞きいっていまし

た。

三諸つく三輪山見ればこもりくの泊瀬の檜原思はゆるかも
(巻七一―九五)

はるかに二上山を望みながら、この自然をいつまでも大切にしたい、いつの日か素敵な彼と来てみたい、などと思いた。

神社を後にして、視界が開けたところはのどかな田園風景の巻向の地です。太陽がまぶしいくらいに照りつけ、巻向川が清らかに流れています。周辺には、文人たちの書になる歌碑も多くあります。巻向川は、

巻向の痛足の川ゆ行く水の絶ゆることなくまたかへり見む
(巻七一―一〇〇)

痛足川川波立ちぬ巻向の弓月が岳に雲居立つらし

(巻七一―一〇八七)

が印象に残っています。

景行天皇纏向日代宮址を過ぎて相摸神社へと歩きました。最終地点に近づくとも名残りを惜しんで「また来年もあるのですか。ぜひ一緒に一緒に下さい。」と先輩の方が先生に尋ねておられました。いよいよ今回最後の目的地、穴師坐兵主神社に到着しました。大神神社・大和神社・石上神宮と並ぶ大社で、穴師山山麓に鎮座して、人々の生活を見守り続けている神社です。先生の丁寧な心のこもった解説も最後となりました

た。もしも「運悪く雨の日になったなら、この歌を最後にとりあげるつもりでした。」と、

巻向の穴師の山に雲居つつ雨は降れども濡れつつぞ来し

(巻一一三一二六)

の歌をうたわれた先生のユーモアあふれる解説に笑いの渦が起りました。

萬葉集を愛される大勢の人たち、初めて会う人ばかりなのに、心のふれあいを感じました。すすきの穂が風に揺れる垂仁天皇纏向珠城宮址あたりで互いに名残りを惜しみつつ解散。萬葉集を愛される大勢の人たちとの暖いふれあいを感じ、日頃の慌ただしさをひととき忘れて山の辺の秋を満喫した有意義な一日でした。次回は、山の辺の道の続きを石上神宮まで歩こうと決まり、今から楽しみにしています。

(国文学科六〇年三月卒業)

以上の他に、国文学科研究室の関係する行事として、相愛女子短期大学公開講座があった。「宗教文化講座」というテーマで、本学学舎を会場に九月五日から十二月十九日までの土曜日に、全八回(午後二時〜四時)行なわれ、盛況を博した。国文学科では教員二名が講師を担当した。プログラムは次にあげる通り。

相愛女子短期大学土曜公開講座

―宗教文化講座―

8	7	6	5	4	3	2	1
12 / 19	12 / 5	11 / 21	11 / 7	10 / 17	10 / 3	9 / 19	9 / 5
シベリア民族と宗教	地鎮祭は宗教か ―日本国憲法における信教の自由―	現代アメリカ文学における宗教 ―ポーターの短編小説からみて―	漱石とは何か ―その文学と宗教―	心理療法と宗教 ―心理臨床からみた救い―	仏教における救い ―浄土真宗を中心として―	平家物語の宗教観	現代人と宗教 ―亀井勝一郎の宗教観を通して―
加藤九 祚	相愛大学元教授	寺田友子	本学教授	プロデリック	本学教授	鈴木 徳男	中西智海